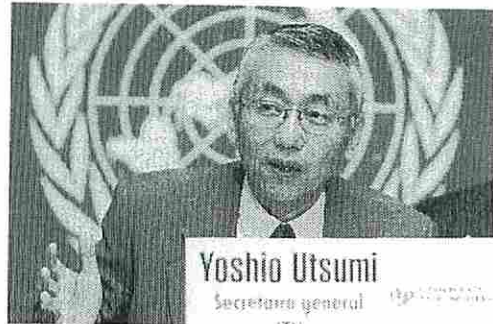


デジタル通信革命の舞台裏

内海善雄 前ITU事務総局長

—16—



Yoshio Utsumi
Secretary General

ITU事務総局長時代、標準化で議論する筆者

使えるという第3世代の携帯電話の理想が壊れてしまふ。すなわち、誰が誰にどれだけの開発技術の使用料を支払うかという交渉である。標準化された方式を使うよう働きかけてほしい。十数年前、日本が米国に「ITU標準に従うべし」と主張したが聞き入れなかった。米国務省の大使である。事務総局長の私は、合意を促進するため、ITUの慣例を破って技術専門化レベルの作業部会へ乗り込むことにした。そのことが利害関係者たちとの間に妥協の潮時を認識させ、まとまらないといわれていた標準化案がまとまった。しかし、それは単に表舞台での出来事には過ぎなかった。裏では、日欧が提案した方式の基本特許を多く持つという米国のクアルコム社と、エリクソン社をはじめとする欧州企業との間で、特許公開の交渉が行われていたのだ。

日本企業の発想の転換が必要に 技術開発戦略

戦略性追求の求められる標準化活動

日本が開発された技術が世界標準となり、日本製品が世界中で売ればこんな良いことはない。この絵に描いたような成功物語が、30年前のファクスのG3規格であった。

1980年に決定されたG3規格の交渉は、ちょうどジュネーブ代表部勤務の時代に行われた。私は、もっぱら日本代表団のお世話をした。国内で調整をつけられなかったNTTとKDDが、ITUの場で調整することにより統一の国際規格を成立させ、その規格のつとめた日本製のファクスが世界を席巻したのである。

その後、標準化活動を語る人は誰も、この成功物語を無意識のうちに考えているようである。しかし、世の中は、そんな生易しいものではない。1988年、私は郵政省で、この標準化活動をサポートする任務についていた。関係者の多大な努力のおかげで、欧米の放送業界は、日本企業は、NTTの「ハイビジョン」は、日本が世界に誇るべき素晴らしい技術であった。

日本企業は、先行しては日本提案に同意したのである。しかし、先行してアクスのように技術開発の先行利益を100%生かすことにはならなかった。

この2大国際標準化事業を垣間見た後、第3世代携帯電話(3G)の標準化に関与することになった。そこで見たのは、標準化活動の裏舞台であった。

1999年、ITU事務総局長に就任したばかりの私のところへ一番に駆けつけてきたのは、米国務省の電気通信担当大使マツカイン女史であった。

「ITUでの標準化合意の前に、日欧が独自のプロトコルでサービスを先行開始しようとしている。そんなことになると、全世界で特許公開の交渉が行われていくのだ。すなわち、誰が誰にどれだけの開発技術の使用料を支払うかという交渉である。標準化された方式を使うよう働きかけてほしい。十数年前、日本が米国に「ITU標準に従うべし」と主張したが聞き入れなかった。米国務省の大使である。事務総局長の私は、合意を促進するため、ITUの慣例を破って技術専門化レベルの作業部会へ乗り込むことにした。そのことが利害関係者たちとの間に妥協の潮時を認識させ、まとまらないといわれていた標準化案がまとまった。しかし、それは単に表舞台での出来事には過ぎなかった。裏では、日欧が提案した方式の基本特許を多く持つという米国のクアルコム社と、エリクソン社をはじめとする欧州企業との間で、特許公開の交渉が行われていたのだ。

(つづく)